テーマ　「大学教育評価をどうするか ── 評価からＦＤへ ──」

司会：荒木　光彦、溝上　慎一

趣　旨　説　明

溝　上　慎　一（京都大学高等教育教授システム開発センター講師）

（溝上）　センターの溝上と申します。今日はこんなに多くの方々にお集まりいただき、ありがとうございました。これまでは、私たちの研究室のある楽友会館の講演室を使って、このフォーラムを開催していました。今年は、研究集会を午前にやることと、評価というフォーラム・テーマをたてたことで、人数が若干増えるのではないかと予想しました。センター長のご助力もあって、この電気総合館と工学部の３号館の一部をお借りして、こういう形で開催することができました。この部屋で260人ぐらい人が入ります。これまでの倍ぐらい席を用意しましたので十分だろうと思っていましたが、申し込みだけで280人ぐらいありました。おそらく当日参加の方、資料だけを持ってお帰りになる方もいらっしゃると思いまして、それでとんとんぐらいになればと思っていたのですが、立って聞いていただく方が出てきたことを大変申し訳なく思っております。来年の反省材料にさせていただきます。

フォーラムの趣旨を簡単にご説明申し上げます。オレンジ色のパンフレットをお持ちの方は、そちらをご覧ください。このフォーラムは今回で８回目になります。私たちは教育現場を大事にしていますので、そこでミッションをもとうとセンター設立以来やってきたわけです。それでも、最初の立ち上げ期を今からふり返りますと、私たちの方向はまだ焦点が定まっていなかったように思われます。最初のフォーラムのタイトルを見ると、例えば日本の大学をどうするかとか、大学教育はいかにあるべきかとか、非常に大きなテーマであったわけです。それも、この３～４回でテーマがだんだん絞られてきました。私たちもプロジェクトを重ねる中で、私たちのミッションがだんだん具体化されてきたのだと考えています。具体的には授業改善、ＦＤ、教育評価、カリキュラムなどを含めた中で、この３～４回はテーマがたてられているように思います。

今年は、評価をテーマにいたします。つまり、大学教育評価をどうするかということです。ご存じのように、評価といいましてもいろいろなレベルがあります。例えば、今日いらっしゃっている舘先生のような、学位授与機構といった外から評価する場合の評価というものがあります。また、もう少し実践の方に下りてきて、カリキュラム評価や学生による授業評価といった評価もあります。

しかし、評価は大事ですが、評価それ自体が目的になってはいけません。例えば、学生による授業評価を集めて、その報告書を一生懸命作るなど論外です。重要なのは、それが現場・実践にどう還元されていくのかということです。先程の総長のお話にもありましたように、ある意味では、評価が値踏み的になることを避けられないこともあると思うのです。けれども、やはり評価をやる以上は、教育現場にどう還元されて、それがどう活かされるのかということを考えなければならない。そうでないと、何のために評価をやっているのかわからなくなります。

今日は、最前線でご活躍されているお三方の先生をお招きしていますので、問題提起というかたちでお話しいただきます。そして、評価をどのように現場につなげていくかということを皆様と討議します。私は先ほど「活かされる」「還元」などという言葉を使ったわけですが、このように評価と実践が分けていわれないといけないようになっているところに、そもそも評価の問題点があるのではないかと考えています。そんなことも、今日の提案の中で聞けるのではないかと楽しみにしています。

先生方のご提案をもとに、最後は皆さんとディスカッションをしたいと時間を長目に取っております。本日はそういう感じで進めさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

（荒木）　それでは、３人の先生からおひとりが30分ずつぐらいでお話をいただきまして、そのあとで討論に入りた

いと考えております。

最初は舘昭先生です。舘昭先生の資料は、本日、受付で配布したものの中の後ろから２枚目か３枚目に入っております。それから、本日この会場でお配りしましたのも舘先生の資料です。その２種類があります。

ご存じの方も多いと思いますが、舘先生のご紹介を簡単にさせていただきます。昭和47年、東京大学の教育学部をご卒業になり、博士課程まで終了された後、奈良教育大学でしばらく教えておられました。それから、放送教育開発センターの研究開発をなさっておられました。そして、学位授与機構の審査研究部の教授になられました。最近、学位授与機構の方が大学評価・学位授与機構と変わりまして、現在、そこの教授をしておられます。

それでは、舘先生、よろしくお願いいたします。